

2022年11月20日
宮崎中部教会主日礼拝
牧師 乾元美

エレミヤ書 23 : 5～6

ヘブライ人への手紙 1 : 1～2

「福音」

(ハイデルベルク信仰問答 第一部 問 16～19)

※問答は「日々の祈り」をご覧ください

【前奏】

【招詞】詩編 33 : 1～5

【祈祷】

【聖書】エレミヤ書 23 : 5～6、ヘブライ人への手紙 1 : 1～2

【説教】「福音」

<まことの人間、まことの神>

来週から、アドベントがはじまります。わたしたちに与えられた救い主、イエスさまのご降誕を覚えて、そのクリスマスまでの備えをする期間です。

10月から、この主日礼拝では、「ハイデルベルク信仰問答」を用いての御言葉の説教を聞いていますが、アドベントを迎えるにあたって、今日の信仰問答は、ちょうど良い箇所であったかもしれません。

信仰問答のこれまでのところを少し振り返ると、その第一部では、造り主である神さまの御心に背き、自分勝手に神さまの許から離れてしまったわたしたち人間の罪が、どれほど悲惨か、ということが語られていました。

そして、神さまはこの罪に対して激しく怒っておられ、正しいお方であるがゆえに、決して見逃したり、曖昧にしたりはなさらないということ。必ず、正しく裁かれるということ。しかし、わたしたちは、自分の罪の負債があまりにも大きい上に、それを日々増し加えているような有様なので、決して自分で自分の罪を償うことなどできない、ということが語られていました。

そして第二部に入り、自分の罪をどうにもできないわたしたちが、その罪を赦され、救われるために。つまり、自分で壊してしまった神さまとの関係を、回復していただくために。わたしたちには、神さまとわたしたちとの間に立って、執り成してくださる「仲保者」、罪から救ってくださる「救い主」が必要だ、と語られていました。

そして、そのような仲保者であり救い主である方は、まことの、ただしい人間であると同時に、まことの神でもあるお方でなければならない、と言うのです。

ところで、聖書に語られているクリスマスの物語を、皆さんもよくご存じだと思います。

神の御子であるイエスさまは、聖霊によって処女マリアに宿り、このマリアを母としてお生まれになりました。聖霊によって、というのは、人間の力によらず、神の力によって宿られた、ということです。そして、人間の女性であるマリアからお生まれになった、というのは、まことの人間としてお生まれになった、ということです。

イエスさまのご降誕の出来事は、まさに、この幼子こそが、まことの人間となられた、まことの神の御子であることを示しています。

この、クリスマスにお生まれになった方こそ、わたしたちの仲保者、わたしたちの救い主なのです。

<なぜその方は>

さて、今日の信仰問答は、ではなぜ、わたしたちの仲保者となる方は、「まことのただしい人間」であると同時に「まことの神」でなければならないのか、と問うています。

今日の信仰問答の間 16 には、まずこうありました。「なぜその方は、まことの、ただしい人間でなければならないのですか。」 わたしたちを罪から救うお方は、まず、まことの人間であり、しかも、ただしい人間でなければなりません。

イエスさまは、まことの人間とられました。それは、すべての人間の罪を、代わりに担ってくださるためです。人間の罪は、人間が償わなければならないからです。

しかも、それは「ただしい人間」でなければなりません。自分も罪を背負っている人間では、他の人間の罪を償うことはできません。自分も罪に溺れている人が、他の溺れている人を救うことはできないからです。

イエスさまはまことの人間とられました。しかし、他のすべての人間と違うところは、唯一、罪のないお方であった、ということです。イエスさまは、神さまが遣わされた、神の御子でありますから、神さまの御心をよく知っておられ、まったく従順に従うことがお出来になります。わたしたちのように、不従順の罪に陥られることはありません。

問 16 の答えに書かれているとおりです。「なぜなら、神の義は、罪を犯した人間自身がその罪を償うことを求めています、自ら罪人であるような人が他の人の償いをするなどできないからです。」

だからイエスさまは、まことの、ただしい人間、であられたのです。

しかしまた、罪の重荷を背負いきり、神の怒りを耐え忍び、かつ、他の人間のことで救うなどということは、ただの人間にできることではありません。それは、この方が神であればこそ、すべての人間の罪を償い、救うことができるのです。

わたしたち人間を救うということは、滅びるべきわたしたちに、罪の赦しと、神さまと共に生きる永遠の命を得させる、ということです。命を得させることは、命を支配なさる神にしかできないことです。

ですから、問 17 にはこうあるのです。「なぜその方は、同時にまことの神でなければならぬのですか。」答「その方が、御自分の神性の力によって、神の怒りの重荷をその人間性において耐え忍び、わたしたちのために義と命を獲得し、それらを再びわたしたちに与えてくださるためです。」

…このような、まことのただしい人間であり、同時にまことの神である仲保者こそ、わたしたちの主イエス・キリストである。ハイデルベルク信仰問答は、そう宣言しています。

問 18「それでは、まことの神であると同時に まことのただしい人間でもある、その仲保者とはいったいどなたですか。」答「わたしたちの主イエス・キリストです。この方は、完全な贖いと義のために、わたしたちに与えられているお方なのです。」

このような仲保者が、わたしたちに与えられています。わたしたちの完全な贖いのために。わたしたちの罪を償い、罪の赦しを、つまり、義を与え、神さまと共に生きる命を得させるために。わたしたちには、主イエス・キリストが与えられたのです。

これは、わたしたちすべての人間が受け取るべき、最上の、最高の、良い知らせです。

<聖書>

そして、この良い知らせを、わたしたちは、聖書の御言葉を通して知らされます。

ハイデルベルク信仰問答の、問 19 の問答はこうです。「あなたはそのことを何によって知るのでですか。」答「聖なる福音によってです。」

「聖なる福音」。これは、「聖書」のことと言って良いでしょう。旧約聖書も、新約聖書も合わさった、66 巻で一つの聖書のことです。

聖書は、色々な時代に、色々な人物の手によって書かれ、また編集されました。しかし、これは聖霊なる神さまの導きの許に書かれた、全体で一つの書物です。

聖書は、「聖なる書」と書きます。今日のところでも「聖なる福音」と言われています。この「聖なる」とは、神さまのものである、という意味です。そして、「福音」とは、良い知らせのこと。聖書とは、旧約聖書から新約聖書に至るまで、神さまの御意志によって書かれた、神さまの良い知らせを伝える、一つの書物なのです。

その良い知らせの中心は、神さまの愛です。聖書はよく、神さまのラブレターと言われたりします。わたしたちは、聖書の御言葉を通して、神さまの愛を知らされます。

だからこそ、わたしたち人間は、この御言葉に、救われること、生かされること、慰められることができるのです。

しかし、そのように聖書から神さまの愛を受け取るためには、聖書が聖霊の導きによって書かれたように、読む側も、聖霊の導きの中で、神さまの御心を読み取らなければなりません。祈りをもって、心を開いて、神さまの愛の書物として、耳を傾けなければなりません。

ですから、わたしたちは、毎週礼拝でこの聖書の御言葉の解き明かしを聞く時にも、必ず、聖霊の導きを祈り求めるのです。

確かに、世の中の誰でも、聖書を手に取って、好きに読むことはできます。でも、神さまの御意志を無視して、自分の意志で、自分が読みたいように読んだり、都合の良いところだけを読んだりしても、神さまの愛の御心を正しく聞き取ることは、決してできないのです。

これが、「聖書」であり、神さまの御心を伝える書、神さまの愛を伝える書であるということを、決して忘れてはなりません。

そして、聖書の御言葉を通して伝えられた、神さまの愛こそ、まことの人となられた、まことの神の御子、イエスさまご自身に他なりません。イエスさまの存在は、わたしたちに示された神さまの愛、そのものなのです。

<旧約から新約まで>

ですから、聖書は旧約聖書から新約聖書に至るまで、すべてが救い主であるイエスさまのことを指し示していると言って良いのです。

わたしたちへ良い知らせである「福音」とは、イエスさまのことを語った四つの福音書や、新約聖書のことだけを指すものではありません。今日の間 19 によれば、神さまは、罪人であるわたしたちのために、救い主を与えてくださるという良い知らせを、創世記の、アダムとエバが楽園で墮落してしまった時から、示してくださっていました。

つまり、旧約聖書の時代から、神さまはわたしたちに救いのご計画を示し、この世界の歴史を、人間の歴史を、救いへと導き、そしてついに、イエスさまにおいて救いの御業を成し遂げてくださった、ということなのです。

間 19 の答えには、「それを神は自ら、まず楽園で啓示し」とありました。

これは、アダムとエバが罪によって楽園を追放される時に、神さまご自身が語り、啓示された、人間を罪から救うとの御心です。創世記 3 : 15 には、神さまが蛇に語られた、このような御言葉があります。「お前と女、お前の子孫と女の子孫の間に／わたしは敵意を置く。彼はお前の頭を砕き／お前は彼のかかとを砕く。」

ここで神さまは、やがて罪は打ち砕かれる、ということを示されていました。

それから次に「そののち、聖なる族長たちや預言者たちを通して宣べ伝え」とあります。

神さまは、御自分が選ばれた人物、アブラハム、イサク、ヤコブを通して。また、彼らの子孫である神の民イスラエルには、選ばれた預言者たちに御言葉を託されて、御自分の救いの約束、ご計画を宣べ伝えさせられました。

また、「律法による犠牲や他の儀式によって象り」とあります。これは、旧約聖書において、神の民に律法で定められていた犠牲や儀式は、イエスさまによって実現する、救いの出来事を予告するものとして、与えられていたということです。

そして最後に、神さまは「ご自身の愛する御子によって、ついに成就なさいました」とあります。「聖なる福音」は。わたしたちの救いの良い知らせは。神さまが、啓示なさり、宣べ伝えさせ、象って予告してこられました。ついに、御自分の愛する御子によって、主イエス・キリストによって、成し遂げられたのです。

これは、まさに今日のヘブライ人への手紙 1 : 1~2 に語られていた通りです。

「神は、かつて預言者たちによって、多くのかたちで、また多くのしかたで先祖に語られたが、この終わりの時代には、御子によってわたしたちに語られました。」

旧約聖書の時代から、語られた御言葉、約束、イスラエルの民の礼拝、営み、歴史、そのすべては、救いを実現なさるイエスさまに、向かっていました。旧約聖書から語られていたすべてのことが、イエスさまに至る「聖なる福音」、神さまの救いの良い知らせだったので。そして、それは事実、イエスさまによって、すべて成し遂げられたのです。

今日の旧約聖書に語られていたエレミヤ書の預言も、まさにわたしたちの救い主が与えられることを預言していました。

23 : 5~6、「見よ、このような日が来る、と主は言われる。わたしはダビデのために正しい若枝を起す。王は治め、栄え／この国に正義と恵みの業を行う。彼の代にユダは救われ／イスラエルは安らかに住む。彼の名は、『主は我らの救い』と呼ばれる。」

この預言は、ダビデの子孫としてお生まれになったイエスさまが、確かに、この神さまのご計画によって示された「救い主」であること。そしてこの預言は、イエスさまによってこそ、確かに実現したということ、証言しています。

旧約聖書は、イエスさま以前の書物だから、キリスト教会には不要なのではありません。掟ばかりの律法の書物だから、もういらぬのではありません。

イエスさまが救いを実現して下さった、その恵みの光の中で旧約聖書が読まれる時。それは、すべてのことが、神さまの愛の御心による救いのご計画であったことを知るために必要不可欠です。また、イエスさまの救いの恵みを理解するための重要な土台となるのです。

<クリスマスのプレゼント>

わたしたちは、聖書を通して、聖なる福音を通して、イエスさまが、確かに神さまが約束して下さった、わたしたちの救い主であることを知ります。

そして、このイエスさまを通してこそ、父なる神さまがどのようなお方か、どのような眼差しでわたしたちを見つめておられるかを、知ることができるのです。

ヨハネによる福音書には、このような言葉があります。「いまだかつて、神を見た者はいない。父のふところにいる独り子である神、この方が神を示されたのである。」(1 : 18)

聖書に示される神の御子イエスさまが、そのご降誕が、その十字架が、その復活が、その昇天が。父なる神さまの御心を示し、すべてを教えてください。

神さまのわたしたちに対する、罪への怒りも、裁きの厳しさも、深い憐みも、そして愛する御子を与えてまで、わたしたちを生かし、救い、共にありたいと望んでくださる、その愛の御心も。わたしたちは、イエスさまにおいて、はっきりと伝えられているのです。

神さまにとって、造られたわたしたち一人一人の存在は、それほどにかけがえのないものだといいます。聖書が語るイエスさまによって示されるのは、父なる神さまの、計り知れないほど深い、わたしたちへの愛の眼差しです。

わたしたちは、神さまの御心がわからない、と思うことがあります。苦しみ呻いている時。絶望のどん底にいる時。罪にとらわれて苦しむ時。居場所がなく心許ない思いの時。神さまはなぜ助けてくださらないのか。なぜわたしをこのような状態になさるのか。そんな風に神さまに問い糾したくなることがあります。

しかし、わたしたちはそのような時にこそ、神さまの愛を求めて聖書を読み、そこに指し示されるイエスさまを見つめなければなりません。

あのイエスさまの十字架の苦しみは、体を引き裂く痛みは、絶望の叫びは、すべてこのわたしと共にあるため、そして、このわたしを救うためのものでした。わたしたちの悲惨さの中に、この神の御子ご自身も、共にあるために来られ、まことの人間の弱さも、痛みも、悲しみもすべてを経験されたのです。そして十字架の死において、この方は、仲保者として、救い主として、わたしの罪も、裁きも、滅びの死も、すべてを引き取ってくださいました。

また、イエスさまの墓の中からの復活は、罪と死に勝利した知らせであり、わたしたちもまた、この勝利のうちに、新しく生かされるためのものでした。この復活の主にあって、わたしたちは新しい命を得て、神さまのものとされ、神の子として今、生きているのです。

これこそがわたしたちに与えられた、神さまの恵みの現実であり、ここにこそ希望を見出すようにと、聖書は教えています。

わたしたちは、仲保者、救い主なるイエスさまが与えられた今や、もはや罪の悲惨の中にいるのではないのです。イエスさまは、わたしたちをご自分の許に招き、あなたの居場所はここにあると。神さまの御許こそ、あなたのいるべき場所であると。そのご自分の十字架と復活の御業を通して語りかけ、またわたしたちの上に、そのことを実現してくださいました。

どのような時も、どこにいても、何があっても、わたしたちは救い主イエスさまの恵みの許にいます。「神は我々と共におられる」と呼ばれる方が、わたしたちの仲介者、わたしたちの救い主、わたしたちの主イエス・キリストだからです。

このことを伝える愛のラブレターを、聖なる福音を、聖書の御言葉を、イエスさまご自身を。わたしたちは、神さまから、しっかり受け取りたいのです。

イエスさまは、まさに神さまからの、クリスマスの愛のプレゼントです。

【お祈り】

天の父なる神さま

わたしたちを罪と悲惨から救い出すために、あなたの愛する独り子イエスさまを、わたしたちの仲保者として、救い主として与えてくださったことを、心から感謝いたします。

わたしたちは、まことのたどしい人となられた、まことの神の御子イエスさまのことを、聖なる福音を通して知らされています。そして、イエスさまによって示されるのは、ただひたすらに、あなたのわたしたちへの愛です。

聖霊なる神さま、わたしたちが聖書の御言葉によって、イエスさまと出会い、救いにあずかり、神さまの愛を確かに受け取ることができますように、導いてください。

このお祈りを、イエスさまの御名によってお祈りいたします。アーメン

【讃美歌】 378 「栄光は主にあれ」

【信仰告白】 使徒信条

【献金】

【主の祈り】

【讃美歌】 24 「たたえよ主の民」

【祝福】 主があなたを祝福し、あなたを守られるように。

主が御顔を向けてあなたを照らし あなたに恵みを与えられるように。

主が御顔をあなたに向けて あなたに平安を賜るように。

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、

あなたがた一同と共にあるように。アーメン